

留学生のための物語日本史

第 6 話 桓武天皇

まだ木の香りのする大極殿（だいごくでん）に内裏（だいら）から出てきた。9 年しかたっていない長岡京からつい先日遷（うつ）ってきたばかりである。

「陛下、新しい内裏はいかがでございましょうか」

「うむ、まだ身体になじまぬが、悪くはないぞ」

「それは何よりでございます」

自他ともに認める桓武天皇の側近、和気清麻呂（わけのきよまる）は、目を細めてそのように言った。何しろ自分がこの地に都を定めるように建言した都合上、ここで桓武天皇に「居心地が悪い」などといわれては困るのである。

「ここは山背国であろう。平城京よりはるかに居心地が良い」

「それはそれは、陛下に気に入っていただきありがとうございます」

「なによりも寺の坊主どもが、何も知らないくせに、したり顔でいろいろ意見しに来るのが本当に腹立たしかったのだ。良いか清麻呂、今後、この条里の中に、寺を建てさせてはならぬ。坊主は仏を語りながら自らの欲望を出してくる。その生臭い匂いがあまりにも卑しく、あの者たちが拝まれていると思うと腹立たしくて……」

「陛下。どうかお気をお鎮め下さり、お言葉をお慎みください」

和気清麻呂は、興奮気味に言葉を繰り出す桓武天皇を、気に障らないようにたしなめた。天智天皇がまだ皇太子の時代、天皇と臣下の間での礼法が確立された。本来、よほどのことがない限り、側近といえども陛下のお傍でこのように親しげに話すことは許されなかったが、この日は特別に許されていた。というのも、陛下が政務を司（つかさど）る大極殿が竣工（しゅんこう）し、また陛下の正式なお住まいである大内裏（だいだいら）もほぼできたところである。

しかし、まだ桓武天皇が政務を始めていないので、本日は特別に「視察」として、和気清麻呂と藤原北家の藤原小黒麻呂（ふじわらのおぐろまる）が付き従ったのである。視察中ということで近くに控え、さまざまな質問に答えられるようにしていた。この二人こそ、長岡京から平安京と名付けられるこの「新しい都」に遷都（せんと）¹することを建議した二人なのである。

¹遷都…都を他の地に移すこと。

「陛下。ここは新しい都でございますれば、ぜひともお心安らかにお過ごしくさいますことを、民百姓の総意としてお願い奉りまする」

小黒麻呂は、和氣清麻呂よりも藤原の家柄であるだけに、桓武天皇の氣質を良く心得ていた。桓武天皇は、感情が激しくまた情熱家でありながらも、一方で臣下というよりは民に対する意識が非常に強い。「民が望んでいる」という言葉が、彼が激情にかられたときにはもつとも響く言葉であるとよくわかっているのである。

「そうか。そうであったな。しかし、長岡は悪いことをした」

「はい」

「多分、平城京の坊主どもが私を恨んで呪いをかけたに違いない。それであのような事件が起きたのかもしれない」

桓武天皇は、平城京において即位したが、外宮にある仏教の寺院があまりにもうるさく政治に介入してくることから、遷都を決意した。これより十数年前のことである。そして、十年前、平城京より北方にある西の岡丘陵に遷都をし、新たな都「長岡京」とした。

このころの遷都は、大極殿と大内裏ができたときに天皇が遷ることで「遷都」という。まだ長岡京そのものに市街地などができていなくても、主要な政治施設が長岡京に移るのである。当然に、遷都後も街づくりは行われていた。当時、藤原式家の藤原種継に「天皇はなはだこれ（種継）を委任し、中外の事皆決を取る」といわれるほど信任しており、長岡京の遷都も街づくりも全て任せていた。

しかし、延暦4年（785年）9月23日夜、種継は造宮監督中に矢で射られ、暗殺されてしまう。桓武天皇はたまたま大和国に出かけていたときだったので無事であった。暗殺犯として大伴家持（事件前に病死）などがあげられ、十数名が死罪。桓武天皇の皇太子であった早良親王（さわらしんのう）の廢嫡（はいちやく）、配流（はいりゅう）²にまで発展してしまう。桓武天皇はもともと早良親王とは不仲であったとされるが、大伴家持や佐伯高成など、早良親王の関係者が多くこのような処分になってしまった。無罪を主張した早良親王は、配流先で抗議のため絶食、そのまま苦悶のうちに薨去（こうきょ）³してしまう。

早良親王の薨去の後、長岡京には天災が相次いだ。長岡京の市に落雷があり、が燃えてしまった。その後日照り干ばつによる飢饉（ききん）、疫病（えきびょう）の流行、桓武天皇近親者が奇病で薨去し、その上伊勢神宮が火事で焼失するというような事件まで発生したのである。桓武天皇は陰陽師に占わせたところ、早良親王の怨霊によるものであると判断され、桓武天皇は、霊を鎮める儀式を二回行い、その上で早良親王を「崇道天皇（すどうてんのう）」

² 配流…島流し。

³ 薨去…皇族・三位以上の人が死ぬこと。

と追尊（ついそん）⁴しその墓を山陵と追称するなど、自分の前に天皇であったかのようにおこなった。そのような時に「怨霊の残る地に残るのはいかがか」と和氣清麻呂と藤原小黒麻呂が建議し、平安京に遷都したのである。

桓武天皇が「坊主たちの呪い」といったのは、この一連の事件のことである。

「朕は、もうあのような事件は嫌だ。そのようにならないように気をつけねばなるまい」

「御意にございます。陛下の遷都により、民も天災が無くなり、喜んでいと伺っており、祝着至極（しゅうちゃくしごく）⁵に存じます」

小黒麻呂は、常に民の目線で桓武天皇と接していた。それが、今まで同じ藤原でありながら式家に虐（しいた）げられていた北家の生き方であると、確信していたのである。

「ところで、なぜこの地にしたのだ」

桓武天皇は周囲を見まわしていった。周囲は新緑の淡い緑が映え、遠くに鴨川か桂川のせせらぎが聞こえる。そして街の造営で町人たちの掛け声が威勢良く響いている。桓武天皇は、そのような目や耳に入る新しい息吹を感じながら、尋ねた。

「お畏れながら」和氣清麻呂がいった。「ここ山背国葛野の地は、鴨川・桂川に挟まれ、美しい水が常に陛下の身边を清めております。また、その川は民にとって山の幸や海の幸を運ぶのに最適で、また水の手にも困りません」

和氣清麻呂は、桓武天皇の表情を確認しながら一つ一つ言葉を選んで話を続けた。

「また、三方を山に囲まれ、天然の要害となっております。南の平城京の寺院の邪気は、これらの山と川で遮られ、また、長岡京の怨霊の上流ですので、怨霊に悩まされる心配もございません」

「なるほど。しかし、『山背国』というのはいかがであろうか」

「お畏れながら、小黒麻呂、妙案がございます」

「赦（ゆる）す。申してみよ」

「はい。山に背の文字は、後ろ向きという感覚がしてあまり良くございません。しかし、以前は大和飛鳥の宮を中心に物事がありましたので、飛鳥から見て山の背の部分がこの山背国であったのです。しかし、今やこの地が都となります。また、この地を突然に名称を変えては民百姓が混乱しましょう。そこで、この天然の要害ということから『山城国』と申されてはいかがでございましょうか」

「ほう。文字を変えるか」

桓武天皇はまんざらでもない感じで、にやりと笑った。

「それは名案である。小黒麻呂、大義である」

「ありがたき幸せ」

小黒麻呂を中心に、こののち、藤原北家が平安京の中心になってくるのは、この時の功績

⁴ 追尊…その人の身分に応じて、死後に称号を贈ること。

⁵ 祝着至極…うれしく思うこと。

も外せない。のちに栄華を誇る藤原道長・頼道の親子は小黒麻呂の子孫にあたる。

「都の名前はいかがいたすか」

「これは私の言葉ではないのですが」

和氣清麻呂は、口を挟んだ。

「新しい都ができてこの地に集まった人は、みな、長岡京に比べ新たに平安がおとずれたとして『平安の都』と呼んでおります。今年、3月16日の宮中の宴で踏歌（とうか）の囃（はや）しがございましたが、その中でも『新京樂、平安樂土、万年春』といわれておりました」

「要するに、清麻呂は『平安京』と名付けよと」

「お畏れながら、それが民の総意かと推察つかまつります」

「ふむ、悪い名ではないな。国の名前に平城京の城の文字を取り、そして、都のまま画に平らかなる願いを込める。悪くない」

「御意でございます」

和氣清麻呂の声に重なってちょうど鳥の鳴き声が聞こえた。

「清麻呂。風流じゃのう」

「陛下の治世を鳥も喜んで証に存じます」

「本当に朕の治世は間違っていないであろうか」

「と、おっしゃられますと」

和氣清麻呂は、自分の言葉に鳥の鳴き声が重なったことから、心配になって答えた。

「いや、鳥は蝦夷地（えぞち）から飛んできたものかも知らぬ」

「蝦夷地でございますか」

桓武天皇は、五年前、紀古佐美（きのこさみ）を征夷大將軍とする蝦夷地征討を行った。しかし、その軍は惨敗し、かえって蝦夷の軍を勇気づけさせてしまったのである。

「陛下の御威光は、日ノ本において夜を照らす陽の光のごときものと思われまします。たまに雲に覆われることがございまして、多くの民は陽の光を待ち望んでおります」

藤原小黒麻呂は、そのように言うと深々と頭を下げた。

「前回の征伐軍で、活躍した坂上田村麻呂を征夷大將軍にしたらいかがでしょうか」

和氣清麻呂は、そのように言った。

「清麻呂、実は今回は、早良親王の事から大伴の家のものを大將軍にして、榮譽挽回をはからせてやりたいと思う」

「陛下にご意見するのは恐れ多いことですが」

「構わぬ。良い案があるならば申してみよ。蝦夷地の民が待っているのじゃ」

「では、申し上げます。補佐役として田村麻呂をつけてはいかがでしょうか」

「なるほど。それもよいかもしれん」

「恐れながら、大伴弟麻呂（おおとものおとまる）は、大伴の家の再興のために必死に職務を全うするものと思われまします。しかし、武辺（ぶへん）のものではございません。名譽

を重んじるものがいれば、蝦夷地の民は心で服することになるでしょう。これに対して、武力で立ち向かってくるものは、やはり武力で向かわねばなりません。武を持って征し、徳を持って治めるは、陛下の治世を世に知らしめる最も良いものと思われまます」

小黒麻呂は、そのように追従した。

「よし、そのようにしよう。大極殿の初めの仕事はそこからであるな」

桓武天皇は、大極殿に上っていった。和氣清麻呂と藤原小黒麻呂は、桓武天皇から一緒に来るように言われなかったので、その場で頭を下げて桓武天皇を見送った。

後日になるが、第二回目の蝦夷地征討は、一進一退の上で大和朝廷軍の勝利となったが、決定的な招致とはならなかった。しかし、大伴弟麻呂は大伴家の名誉は回復できたのである。そして、延暦 20 年（801 年）の遠征では名実ともに坂上田村麻呂が征夷大將軍として軍を預かり、蝦夷地の総大将であるアテルイら 500 名の敵軍将兵を京都に送還し、蝦夷地の脅威はなくなり、田村麻呂が拠点として志波城（しわじょう）を築くころには、ほぼ平定されたのである。そのまま平定できるとしていた時に、平安京の造営や全三回の軍事遠征で民百姓が困窮にあえいだため、桓武天皇は、遠征を中断することになる。

和氣清麻呂や藤原小黒麻呂は、桓武天皇と図り、桓武天皇の正当性を世に知らしめるために「続日本紀」を記し、また、平城京の仏教を治めるために、最澄と空海を保護し、延暦寺と金剛峰寺を「平安京の外」に建立することになる。このようにして、桓武天皇の時代に、「長きにわたる平安京の基礎」が作られたのであった。

第7話 菅原道真

オンボダロシヤニソワカ

オンバサラダドバン

オンアビラウーンクハン

オンアメリタティー

ゼイカラウーンノウマクサマンダボダナン

比叡山延暦寺東塔の尊意和尚が怨霊封じのお経を唱えた。本来ならば密教の人々が行うのかもしれない。しかし、怨霊が天皇にまで影響を与えたとなれば話は別である。民間の怨霊封じとは異なり、朝廷全体の問題である。

尊意和尚の額には汗が浮かび、自然とその声にも力が入る。相手はなかなか強い力である。いや、今まで対峙した怨霊や不浄霊の中では最も強いものであるかもしれない。その様になっていると、急に背中に冷たい水をかけられたような感覚が襲ってきた。

「来たな」

尊意和尚は覚悟した。怨霊封じは、僧侶と怨霊の力比べてある。怨霊の方の力が強ければ、自分を取り殺されてしまう。怨霊に取り殺された霊は天上界に行けず、輪廻転生の輪の中から外れてしまい永久地獄の中に入ってしまう。

「お主か。私の行く道を遮るのは」

「いかにも。延暦寺僧侶尊意と申す」

「私が右大臣菅原道真と知ってのことか」

「いかにも」

護摩木の炎の上に、憤怒の表情の菅原道真が浮かび上がった。黒の装束をまとい、朝廷に出仕する場合の左大臣の正装を身にまとっているものの、その顔はどう見ても怨念に歪み恐ろしい形相であった。

「なぜ私の行く道を遮る。尊意和尚には罪がないゆえ、今ならば許して進ぜる。誰かに頼まれたのであれば申してみよ」

「右大臣様に申し上げる。もう国を呪うのはおやめ願いたい」

「なぜだ」

堂の中全体に響き渡る大音量で、菅原道真は言った。その言葉は威圧感に満ち、平静を装っている尊意和尚であっても、一度座り直し、居住まいを正さねばならぬほどである。東塔の外でこのありさまを見守っている人は、この瞬間、大きく揺れる東塔を目にするのである。

「右大臣殿は、この国を作られました。清和天皇のご信任厚く、無駄が多いとされた遣唐使をおやめになられた」

「いかにも」

「それはいかなるお考えに基づくか。われら延暦寺は開祖最澄が塔より持ち帰った天台

の教えを広め鎮護国家に努めているが、その考えがおかしいとお思いか」

道真は、憤怒の表情を解き、ニヤリと笑った。

「教えて進ぜよう。近年、隣国唐は帝国内部が腐敗し、日本国が得られるものは何もなく
なった。何も滅びゆく国に使者を送る必要はない。また、日本の国は十分に発展し日本の独
自の文化を伸ばすことこそ、朝廷の発展の基礎と思う。そもそも、遣唐使を止めても、延暦
寺は国家の尊崇を集め全く変わりなく信心に勤めているではないか。必要が無くなった遣
唐使を廃止したのであり、今まで唐より得た知識を否定するものではない。そう心得よ」

「なるほど、右大臣様の申すこともっともである。では重ねて聞く。なぜ清涼殿を燃やす」
菅原道真は、この質問に逆に居住まいを正した。

「清涼殿か。雷を落とした。いかにもこの私の所業であるが」

「清涼殿に罪はないはず。また、火事になり多くの日の本の国の民が死んだ。悪人を崇る
ことは、仏の教えには背くが、それでも理解はできる。しかし、なぜ罪のない、清涼殿の火
を消そうという人の命まで奪うのか」

「うむ。しかし、和尚。そもそも、清涼殿そのものが藤原時平など、讒言（ざんげん）の
うそつきどもに穢され、すでに清涼殿としての機能を失った。今は国の政治を私し、私腹を
肥やし、朝廷の権威に群がる悪人しかいない。命を失ったものは不憫と思うが、しかし、命
を失った者たちは、その穢れてしまい、悪が蔓延（はびこ）る本当の姿の清涼殿を見て見ぬ
ふりをしている者たちである。罪はないが、しかし、真実を知る心眼を持たぬ者。致し方な
い」

道真は、少し反省しているかのような言葉でそのように言った。

「罪なき者の命を奪い、満足か」

尊意和尚は慈愛に満ちた言葉で道真に声をかけた。道真は、その言葉で再び憤怒の表情に
なり、尊意和尚をにらみつけた。

「満足などするか」

「では何をすれば満足なのか」

「この国から悪をすべてなくすことである。そのために、悪に染まったもの、悪を見抜け
ぬ心眼を持たぬものを滅ぼす」

「それほどの怒りであるか」

「いかにも」

道真は、一呼吸おいて、尊意和尚を諭すように言った。

「私が何をした。幼少のみぎりから文学文章に努め、文章生（もんじょうしょう）⁵から、
この国を良くせんがため、精進してきた。国家の財政や文化を比較し、遣唐使を廃止した。
また、諸国民の意見を聞き、国民のための政治を行うために、諸国へ問民苦使（もみくし）

⁵ 文章生…平安時代、大学寮で詩文や歴史を学び、寮試に合格した者。

6の派遣をし、民の苦しい実情や、平素の生活の実態をすべて帝に報告し、政治に活かしてきた」

「全て、右大臣殿の功績にございます」

道真は満足そうな表情を浮かべ、そのまま続けた。

「そうであろう。また、藤原家であっても、私に感謝しておかしくないはず。宇多天皇の時、関白藤原基経殿が『阿衡（あこう）に任ずる』と命を受けて、成務を放棄した。政治は停滞したが、そのまま藤原北家をすべて排除しても問題はなかったはずだ。橘広相（たちばなのひろみ）を処分するなど息巻いていたが、そのようにして恨みを買えば、藤原基経は、当然に、世の信頼を失い排斥されていたに違いない。文書によって諫めてやったから、何とか温厚に解決した。しかし時平はその恩も忘れ、嘘偽りで私を陥れるとは、到底許されるものではない」

「藤原時平父子のことは何も問うておりません」

「和尚、時平のことは申さぬとな」

道真の表情が一瞬和らいた。

「いかにも。仏の道においても恩を裏切り讒言嘘偽りを申すものは救われぬとある。当然に右大臣様の怒りがあり、天罰が下っても何らおかしいとは思わない。しかし、天子様はいかがであろうか」

「醍醐帝のことか」

「いかにも」

尊意和尚は落ち着きを払っていった。道真は、その威厳と落ち着きに少したじろいだようだ。

「あれは」

「右大臣殿。そもそも右大臣殿が右大臣という役職であらせられるのは、帝からその役職をたまわったからではござらぬか」

「うむ」

「右大臣殿は朝廷そのものをお恨みか。それとも醍醐帝お一人をお恨みか」

「うむ」

「醍醐天皇の皇子で東宮の保明親王（やすあきらしんのう）はなぜお命を奪った」

「東宮の命を奪ったわけではない。藤原時平の血筋を屠（ほふ）っただけである」

「なるほど、では、その息子で皇太孫となった慶頼王（よしよりおう）も藤原時平の外孫であるからお命を頂戴したというのか」

「いかにもそのとおりで。この世に、あのような穢れた血の者が天子の立場にいることは許されぬ」

6問民苦使…律令制の令外官（りょうげのかん）の一つ。地方行政の実情を調べ、監督するために派遣された。

「では、醍醐帝は藤原の血筋ではないのに、何故崇ったのだ」

「醍醐帝が私を大宰府に避けられたのである」

「しかし、その醍醐帝は右大臣殿を右大臣として活躍させた宇多上皇の御血筋。そもそも藤原時平に騙された被害者と思わぬか」

「うううう……」

道真は、尊意和尚の尋問にたじろいだ。心なしか道真の周囲から怒りの情念が消え、悲しみの雰囲気変わった気がする。

「右大臣殿、帝に障りがあれば、当然に、国事に差し障りが出る。そうであれば、最も困るのは、右大臣殿が最も思いを寄せ、そして問民苦使までして守ろうとした大御宝である民百姓ではないか。そうは思われぬかな」

尊意和尚は、道真の表情が悲しみに変わったことをとらえ、強い語気から、諭す口調に変えた。

「私が間違えていたというのか」

「右大臣殿、人は誰でも間違いがあります。そのために仏の救いの道があるのです。醍醐天皇も、この塔の中でしか言えませぬが、右大臣殿を遠ざけたことは間違いであったと後悔されていることでしょう。そのために甘んじて右大臣殿の仕置きを受け、御身が病に伏せられても病氣平癒の祈祷を受けられなかった。そちらに行って右大臣殿と語り合いたかったのではないかとご推察申し上げます。しかし、右大臣殿が憤怒の形相であられ醍醐の帝は、右大臣殿と話すこともできず、悲しみに暮れています」

尊意和尚は一呼吸おいて続けた。道真は神妙な顔で尊意和尚を見ている。

「また、右大臣殿が遣唐使を止めてまで守ろうとした日本国は、あなたが崇りで政務を止めてしまったために、荒廃のみ進みつつある。これを止めねばなりませんまい。右大臣殿、今こそその力を日本国のため、大御宝である民百姓のために使われたらいかがであろうか」

「和尚、もっともである。では、いかがいたしたらよいか」

「一条の帝は、右大臣殿を天満宮天神として祀り、その力を国に役立てようとしておられます。ぜひ、そのお力を使い、文章の力と学問の力を民百姓に授け、藤原北家の専横を監視する多くの臣を育てられることに尽力していただけるとありがたい。右大臣殿のように、家柄も何も関係なく、本当に国を思い本当に実力のある臣を朝廷に多く輩出することこそ、この国を盛り立てることであり、民百姓を救うことではありませぬか」

「うむ」

道真の後ろが徐々に光を帯びてきた。

「和尚。ありがとう。私は死してまで道を誤るところであった。これからは怒りを治め、国のために私の力を使うことにしよう」

「ありがとうございます」

「ところで和尚。お主、なぜそこまで命を懸ける」

「もちろん、国のためでございます」

「私のためではないのか」

「申し訳ございません。民百姓が何の影響もなく、また、国が傾かなければ、私は右大臣様の前には表れてはいないでしょう。延暦寺は、国家鎮護の護城でありますれば、その点はぜひご理解をたまわりたく」

「わっはっはっはっ」

道真は大きな声で笑った。

「同じ国のための思い、しかと受け取った。僧侶と靈、互いに立場は違っても、ともに国のために努めようぞ。また迷ったら、私を呼び出してくれ。苦しゅうないぞ」

道真は、笑いながら天に昇って行った。延暦寺東塔外でその様子を見守っていた人々は、塔の先端が一瞬光りその光が天に向かって伸びる姿を見ていた。見間違いでもなんでもない。誰もが同じ光景を見たのだ。

尊意和尚は、その後も国家鎮護のため力を尽くした。延暦寺東塔は、寺院でありながらも、この道真の怨靈を鎮めたことから、「登天天満宮」と呼ばれ、織田信長に焼かれるまで、庶民に親しまれていたという。